

ブラニス・フォン・サイベリアン(サイベリアン家の説法師)

柳のように背が高く、痩せ細ったこの白と灰色のブチ猫——ブラニスはサイベリアン家の説法師特有の純白のローブを纏っています。彼はサイベリアン家の書記であり、事務官であり、そして促進者（ルビ：ファシリテーター）です。PCたちのパーティーのような猫のグループと接することも多く、高貴な血筋と地位の持ち主として知られています。しかし、それ以上に彼について家中で、否、連合君主国に広く知られている特徴があります——彼は決して言葉を違えることがありません。ブラニスがそう約束したのであれば、それはそうなのです。

ブラニスはアンゴラ家からの謎めいた旅猫——テイリュ・スケイ——の件を、彼女が姿を見せた時からずっと担当しています。彼は一刻も早く古代の遺跡に調査隊を送り、サイベリアン家に直接の危機をもたらすものではないと確認するとともに、他の猫たちがたどり着けぬよう道筋を不明瞭にしたいと考えています。

テイリュ・スケイ・フォン・アンゴラ(病に伏した学者)

病に伏し、骨と毛皮だけになったテイリュは、ストーリーの開始時には寝たきり状態で高熱にうなされながら、書庫で体面した恐怖を追体験する悪夢を見ては覚めを繰り返しています。その言葉は不明瞭ですが、同時に彼女は、彼女が持ち得ているかもしれない情報を秘密裡に葬り去るため差し向けられた、アンゴラ家の暗殺者の標的でもあるのです。彼女が近日中に北への旅についてこられるまで回復することはありません。しかし、熱にうかされた状態ながら覚醒し、記憶に眠る情報を語ってくれるかもしれません。

カイラ・グラッセ(アンゴラ家のスパイ)

小柄ですらりとした体格と灰色の毛並みを持つカイラは、長年アンゴラ家にスパイという形で仕えています（名前からは主家名を抜いています）。彼女はこれまでサイベリアン家の軍事力の分布や規模、武器や宝物の位置などを伝えてきました。その中でも最大の発見は、スミロドン家の者の手によると思われる「山脈の北の地図」と題された書物であり、そこには灰の大地を越えて知られざる古き者の遺跡に至るルートが記されていました。アンゴラ家の調査隊がサイベリアン君主国を通った際には、道案内として同行しており、テイリュとウボとも面識があります。カイラは知識と、古き者の秘密を解き明かすことの大事さを強く信じており、これが彼女の秘められた主家への忠誠の原動力となっています。その大儀のためであれば、彼女は手段を選ぶことはないでしょう。

カイラ・グラッセ/KYLA GLACEE(脅威度1)

ディフェンス・クラス：15（スケイルメール）

スタミナ・ポイント：14

移動速度：30フィート

習熟ボーナス：+2

能力値：【筋】+2（14）、【敏】±0（10）、【耐】+1（11）、【知】+1（12）、【判】+1（11）、【魅】+2（13）

技能：〈隠密〉、〈威圧〉、〈踏破〉

攻撃：鉤状のナイフ（+5近接攻撃、1d6+3〔刺突〕ダメージ）、ショートボウ（+3遠隔攻撃、1d6+3〔刺突〕ダメージ）

秘奥：《暗視》《精緻な一撃》

エップ・ブラックバック(カイラの斥候)

ひよろ長くも筋肉質な肉体を持つエップは、これまでカイラのために幾つもの任務をこなしてきました。もつとも、彼は彼女の真の主家を知らず、彼自身は忠誠を捧げる主家を持っていません。生国はサイベリアンですが、流浪の猫としてエップは広く遠く世界を巡っています。物静かで、恐ろしげで、断定的なエップは、実はカイラに恋をしており、彼女のためであればほとんどなんだってします。とはいえ、彼の根底には“見えざる者”に対する根深い恐怖があり、立ち向かうよりは尻尾を巻いて逃げてしまうことでしょう。エップがカイラの秘密に対してどう反応するかは、ガイドが決めるといいでしょう。

エップ・ブラックバック/EBB BLACKBACK (脅威度1)※(脅威度2の雇われ刺客と同じデータ)

ディフェンス・クラス：14 (革鎧)

スタミナ・ポイント：22

移動速度：30フィート

習熟ボーナス：+2

能力値：【筋】+3 (16)、【敏】+0 (11)、【耐】+0 (10)、【知】+0 (10)、【判】+0 (10)、【魅】+0 (10)

技能：〈隠密〉

攻撃：ダガー (+5 近接攻撃、1d6+3 [刺突] ダメージ)、またはクロスボウ (+2 遠隔攻撃、1d6[刺突]ダメージ)

秘奥：《暗視》

- ・《狂戦士》：雇われ刺客は、1回のアクションでダガー又はクロスボウによる攻撃を2回行える。
- ・《不意打ち》：エップの攻撃が有利な場合、命中すると追加で1d6のダメージを与える。
- ・《隙有り!》：エップがこのラウンドでまだアクションを使用していない相手を攻撃した場合、その攻撃は有利になる。

“偉大なる”ウガルト(アナグマ大公)

筋骨隆々とした巨漢で、恐ろし気な容貌の持ち主である“偉大なる”ウガルトは、“深き大河の赤きアナグマ”——北方におけるアナグマの王“赤”のキブの部族の分派——を率いています。全身傷だらけの歴戦の勇士である“偉大なる”ウガルトは口をはさむ者や侮辱を決して許さず、大体の問題には暴力でもって対処しようとします。多くの猫はアナグマ族を蛮族とみなしていますが、ウガルトとその民はサイベリアン家同様“見えざる者”の脅威にさらされており、冒険心に溢れながらも慎重な猫であれば奇妙な同盟関係を結ぶことも不可能ではないでしょう。

ウボ・フォン・アンゴラ

筋骨たくましい偉丈夫なウボは、しかし狂気に侵されています。かつては書庫へ向かうアンゴラ家の調査舞台の厳格なリーダーでした。それが今では書庫の狂った守り猫です。齧歯類や他に食料になりそうなもので糊口をしのぎ、書庫の中を流れる黒い水で乾きを癒し、書庫の通路に点在する楕円形の“すくりいん”を通じて禁断の知識を頭に詰め込み続けています。

ウボはテイリュが逃げ出したことを承知しており、予断を許しておくつもりはありません。彼は書庫に侵入者対策をほどこしており、もし来たとしたら全力でもって殺害しようとするでしょう。外の世界がこの場所に秘められた知識を手にすることは許されないのですから。

ドッペルゲンガー(書庫内で目覚めた”見えざる者“)

多くの猫が“見えざる者”について、まるで実在する強力な存在であるかのように話しますが、“見えざる者”の存在と関与が公然と明らかになったケースは極めて稀にしか存在しません。そんな数少ないひとつが、スミロドン家の滅亡です。猫の中にはスミロドン家が暗黒の勢力に侵され、ついに取り込まれてしまったのだと考えている者もいます。

書庫の深淵に潜む“力”を、ウルボは呼び起こしてしまいました。その名はザ・ダブル——生者の姿をコピーし、仕草を真似ることで、計り知れぬ奇怪な目的を達成せんとする“見えざる者”です。それは、当然ながらウルボの崇拝をうとましく思っています。が、同時にウルボの狂ってしまった精神を喰らうことができません。ザ・ダブルは新たな、正気の猫を求めています。彼らを発狂すれすれまで拷問し、狂気で“腐る”寸前に殺し喰らうために。それだけが、この化物の食料なのですから。

ドッペルゲンガー／THE DOUBLE(脅威度7)

ディフェンス・クラス：20 (この世ならざる力場)

スタミナ・ポイント：72

移動速度：30フィート

習熟ボーナス：+5

能力値：【筋】+0 (10)、【敏】+0 (11)、【耐】+1 (12)、【知】+2 (14)、【判】+1 (12)、【魅】+1 (12)

技能：〈感知〉、〈探索〉、〈隠密〉、〈生存〉

攻撃：見えざる力場 (+7 近接または遠隔攻撃、2d6+2 [殴打] ダメージ)

秘奥：《耐性：銀武器による攻撃以外すべて》《脆弱性：銀武器》《暗視》

- ・《鏡像変化》：邪霊は一瞬で目視することができる目標の外見と声に変化することができる。目標と邪霊を見分けるには難易度12の【判断力】判定に成功しなければならない。

- ・《呪力吸収》：近接攻撃がスペルキャスター能力を持つ目標に命中した場合、邪霊は目標に難易度16の【知力】セービングスローを強いることができる。セービングスローに失敗した場合、目標は1d4つの呪文スロットを失い、邪霊は同じだけのスタミナ・ポイントを回復する。

- ・《呪文反射》：邪霊が呪文に対するセービングスローに成功した場合、その呪文をコピーし目標を反転することが可能です。邪霊は、アクションとしてコピーした呪文を使うことができます。もしセービングスローに成功してコピーした呪文を使う前に、別の呪文に対してセービングスローに成功した場合、新しい呪文で上書きするか、以前の呪文のまま新しい呪文をコピーしないことを選択することが可能です。

ヤギモドキ／GOAT-THING(脅威度1)

ディフェンス・クラス：12

スタミナ・ポイント：12

移動速度：40フィート

習熟ボーナス：+2

能力値：【筋】0 (10)、【敏】+1 (13)、【耐】+2 (15)、【知】-4 (2)、【判】+1 (12)、【魅】-1 (8)

攻撃：角攻撃 (+5 近接攻撃、1d6+2 [殴打] ダメージ)

秘奥：《低光量視覚》、《嗅覚》